



2026年1月15日 森本紀行はこう見る

## 金利上昇で預金獲得に努力する銀行は愚かなのか

銀行や信用金庫は、融資への需要が伸びないなかで、積極的に預金を集めて、どうするのか、逆に、資本市場で金利が上昇するなかで、預金の流出が始まつたら、どうなるのか。

銀行や信用金庫等の預金取扱金融機関の本質は、その名の通り、預金によって資金を調達できる特権にあります。預金が特権と呼べるほどに有利なのは、預金は現金の現実的な存在形態であり、資金決済の舞台なので、そこに資金が必然的に滞留するからです。つまり、預金取扱金融機関は、預金を通じて、現金の保管と決済という社会的に重要な機能を提供することで、同時に、その反対効果として、有利な資金調達手段を確保しているわけです。

ただし、当然のことながら、資金は、様々な事情のもとで、常に預金から流出し、逆に預金に流入します。しかし、預金は資金の流入出によって絶えず変動しているながらも、その大層は底溜まって動かないのあって、この動かない底溜まりの預金、即ち、粘着性の高い預金が資金調達手段として機能しているわけです。

**粘着性預金が融資の原資になるわけですか。**

預金取扱金融機関は、産業界に資金供給する社会的責務を負うからこそ、その原資の安定的な確保のために、預金という特別な資金調達手段を付与されているわけです。そして、その資金供給の標準的手法として想定されているのが融資なのであって、融資を行ひ得るために、預金の粘着性が必要になるのです。なぜなら、融資を行えば、資金が弁済期日まで固定化てしまい、その間、預金の流出に対応できなくなるからです。

こうして、預金取扱金融機関の基本的な利益源泉は、利鞘、即ち、預金による資金調達費用と融資による資金運用収益との差分になるわけですが、更に、利益源泉を突き詰めれば、粘着性預金の金利費用の低さに帰着するのです。なぜなら、粘着性預金は、実際上は、引き出されることのない長期の調達手段になつてゐながら、形式上は、常に引き出され得る最短期の調達手段なので、その金利は低く設定されているからです。

預金に粘着性を付与するためには、金利以外の費用が嵩むのではないでしょ  
か。

預金を集めるためには、店舗経費等の多くの諸費用を要します。そこで、預金取扱金融機関の経営の要諦は、預金獲得のために多くの費用を投じるのではなくて、より少ない費用で預金が自然に集まり、かつ滞留する仕組みを構築して、粘着性の高い預金を確保することになります。例えば、そうした仕組みの典型例が給与振込口座なのですし、地域金融機関は、特定地域に営業基盤を限って、その地域経済のなかの資金循環の主舞台となることで、粘着性の高い預金を確保してきたのです。

実際には、多額の費用をかけた積極的な預金獲得競争が展開されてきたのでは  
ありませんか。

かつての経済成長期には、産業界の資金需要が旺盛だったので、預金取扱金融機関は、それに応えるために、預金の増収に注力したのですし、それに要した費用は、十分に厚い利鞘のなかで吸収できたのです。しかし、現在では、低成長の定着によって、状況は一変していて、預金残高は、融資需要に比して、過剰となっていますから、預金を増加させることに実益はなく、むしろ、逆に、預金を削減することで、経営効率を改善させる余地が拡大しているはずです。

しかし、現在でも、依然として、預金獲得競争がなされているようですが。

事実としては、現在でも、預金獲得競争が展開されています。これは不可解なことで、そこに合理的な理由を見出すことは必ずしも容易ではありませんが、おそらくは、多くの様々な複雑な事情が作用しているのです。例えば、何らかの固有の事情のもとで、ある特定の金融機関が預金増収に動くと、周辺の他の金融機関は、預金流出を阻止するために、防衛的な反応として、自らも預金増収に動くという連鎖が生じるのかもしれません、単なる古きよき時代に身についた惰性で、預金を集めてしまう可能性もあり、預金が減少することへの不安が働いている面もあるでしょう。

金利上昇によって、利鞘が拡大するという合理的期待は成り立たないのでしょ  
か。

おそらくは、非常に長く金利のない期間が継続した後で、金利が上昇に転じたことは、改めて、預金に関する伝統的思考が復興する契機になったのだと思われます。つまり、かつての経済成長期のように、金利が上昇すると、運用収益の増加が先行し、調達費用の増加が遅行するので、利鞘が拡大するとの思惑が働いているわけです。

しかし、現在の状況においては、金利の上昇によって、利鞘が拡大するとは限りません。なぜなら、融資需要の増加は見込み得ないからであり、少なくとも、預金増に見合うだけの融資増を期待することはできないからです。また、融資によらず、市場で運用するとしても、金利上昇によって、保有国債の価格下落が深刻な問題を招いているなかで、投資の専門家ではない預金取扱金融機関にとって、安定的な運用収益を得ることは極めて困難です。

インターネットを通じて、金利を高めに設定して、定期預金を集める金融機関もあるようですが。

インターネットの利用は、預金獲得のための経費を抑制するために有効でしょうが、金利を高めに設定した定期預金では、決して粘着性は生じないどころか、金利に感応して流入する預金は、容易に金利に感応して流出すると考えられます。そもそも、預金取扱金融機関の経営の要諦は、金利変動に左右されないように、利鞘を安定化させるところにあるのであって、調達構造が金利に感応するのは好ましいことではありません。

融資においても、金利の低さを競うようになれば、預金取扱金融機関の経営は行き詰るわけですね。

預金取扱金融機関は、相互に競争するわけですが、その根本的な事業構造、即ち、預金金利と融資金利との間の利鞘が利益源泉であることにおいて同一なので、理屈上、金利を競争の対象にしてはならないのです。なぜなら、預金金利の競争は、調達費用を増加させ、融資金利の競争は、運用収益を減少させるので、競争の極限において、預金取扱金融機関全体の利鞘が消滅し、事業基盤が崩壊するからです。

では、預金取扱金融機関は、どこで、何をもって、競争するのでしょうか。

融資においては、競争の対象となるのは、顧客との関係の深さであり、密着度です。即

ち、顧客の現況について、深く理解するからこそ、与信管理が高度化し、適時適切な支援等の対策が可能になるのです。また、顧客の事業性、即ち、未来へ向けた現金創造能力を正しく評価するからこそ、担保に依存せず、直近の業績に多少の問題があっても、融資を実行できるわけです。つまり、当然至極のことながら、融資における競争力は、他の金融機関には貸せない先に貸せることであって、どの金融機関にも貸せる先に貸せば、不毛な金利競争になるだけなのです。

調達においては、競争の対象となるのは、預金の金利によらない粘着性です。例えば、注目される動きとしては、様々な決済手段を提供し、最終的な決済の帳尻を預金口座で合わせることで、そこに資金を自然に滞留させようとする戦略があります。あるいは、表現を変えれば、ある経済圏のなかで、様々な取引がなされるとき、その決済基盤の根底にある預金を支配すれば、そこに金利によらない粘着性が生じるということです。

資本市場で金利が上昇すると、預金は流出するでしょうか。

資本市場で国債の利回りが上昇すれば、預金から資本市場への資金流出が始まると考えられます。このとき、預金取扱金融機関は決断を迫られますが、合理的な判断としては、自然な預金の流出を許容して、顧客を国債や投資信託へ導き、そこで囲い込むことになるわけです。実際、預金取扱金融機関に国債と投資信託の販売が許されているのは、この日の来ることが想定されたからです。

もっとも、どの程度まで国債の利回りが上昇すると、預金の流出が始まるのかは不明です。また、過剰な預金だけが流出し、融資量を維持するのに適当な量の預金が残るとは限らないわけで、預金取扱金融機関は、この点の危惧、即ち、預金の過度な減少への不安に陥っていて、それが逆に預金獲得の動きを誘発させているのでしょう。